四連協ニュース
第7号
文四年生連絡協議会事務局発行
一九六八・七・一〇

学校側の就職事務再開拒否〈スト体制の切り崩し策动〉を大衆的に粉砕しよう！

学校側は長期静観＝学生の消耗斗争からの後退をねらっているのだ！！

六・二〇評議会調査七計上決定白紙撤回、評議会大衆団交実現、筑波移転阻止の主スローガンのもとに文学部自治会が、六月二十五日の臨時学生大会での圧倒的多数の賛成によりストライキに突入していらい今日で十五日目を迎える。その間、六月二十九日の学生大会では本館封鎖突入を決定し、七月二日学生大会においては要求貫撤まで夏休み中をも含むところの長期ストライキ体制を確立し、文学部自治会は全学友の先頭に立って斗ってきた。このような中で理、農学部の学友がスト权投票→スト权の確立→スト突入と立ちあがり、全学的な斗争の昂揚を呈してきた。しかしながら、学校側・評議会は未だわれわれの前に姿を一切みせずわれわれの要求である大衆団交に応じようとしないばかりか、何らの回答もせず雲隠れしている。これは明らかに夏休みの到来＝学生の帰省による スト体制の崩壊、消耗感の発生を意図している。また一方では、教室会議、教官による学生の説得工作などによるスト体制への積極的切り崩し策动が活発に展開されている。

就職事務再開に向けて全ての四年生は今までの学生生活を総括し立ち上がろう！！

今までの「四連協ニュース」で再三述べてきたように、就職事務拒否は、四年生にとって就職ということが極めて長期的にその個人にとって重大な問題であるだけに、学校側のスト体制切り崩しの手段として全く卑劣な方策として行われているのである。われわれはここで単にストと就職事務を二律背反的に把えるならば、まさしく学校側の策动にのっかってしまうことになる。われわれ四年生が今まで三年余の学生生活を総括することなくしては、また自己の社会との関わりを自らに向いかけることなくしては、就職の問題は考えられないであろう。だとするならば、筑波斗争という現実の中でその現実に自らどのように対決していくのかという視点を抜きにして、就職事務再開のために本館封鎖解除＝スト体制の解除を叫ぶことはできない。現在においてわれわれ四年生が、今述べたような視点に立ってなしうること、なすべきことは、四年生の組織的な大衆的な結集でもって学校側に対し就職事務再開を要求し、行わせていくことである。教授個々人によるところの就職事務を排し、断乎四年生の組織的大衆的な結集力でもって就職事務再開をかちとることこそが、四年生を斗争の弱い環から強い環へと転換させていくことになるのだ。

各クラスで就職事務再開要求署名を集約し

本日の「四連協第五回総会」（十時半～、6406）に全ての四年生は結集しよう！！

教員採用試験が迫っている（締切日補導課、県教育委―　埼玉（11日、15日）静岡（12日、17日）山形・岐阜・福井・京都・奈良・広島・高知・熊本・名古屋市を希望の人は必ず結集するよう呼びかけます。